国語

注　意

1 問題は 1 から 5 までで、14ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
3 声を出して読んではいけません。
4 答えは全て解答用紙にＨＢ又はＢの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、、や。や「などもそれぞれ一字と数えなさい。
6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ◯ の中を正確に塗りつぶしなさい。
9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

(1) 定石通りに攻める。

(2) 多大な恩恵を被った結果だ。

(3) 彼に賛仰のまなざしを送っていた。

(4) 居丈高なふるまいをする。

(5) 手練手管を尽くして説得する。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) 君の意見にイゾンはない。

(2) みんなで様々な対策をコウじる。

(3) ナマハンカな心構えでは決してうまくいかない。

(4) 自己中心的な人が増えていることはカンシンにたえない。

(5) ウゾウムゾウの連中の言うことは全く気にしなくていい。

3 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

練習試合が終わり、関谷第一の選手たちが引き上げた後、沙耶は磯村監督に呼ばれた。

「結城。」

「はい。」

「今日の結果に驚いとるか。」

「はい。」

正直に答える。

ものすごく驚いていた。

「まさか400点台を出せるなんて、考えてもいませんでした。」

「じゃ、何を考えとった。」

「え？」

質問の意味が解せない。沙耶は、(1)唇を結び顎を引いた。

「あの試合中、＊ライフルを構えて何を考えとったんだ。」

磯村監督はやや口調を緩め、問い直してきた。

それでも、すぐには答えられなかった。

「何を……。」

考えていただろうか。

「標的のこと、でしょうか。」

「うん？」

「標的です。練習のときとは違って……、どう違うか上手く説明できないんですが、違ってて、(2)それで……怖かったです。」

「怖い、か。」

磯村監督の目が細められた。無意識なのだろう、唇を軽く舐める。その仕草が小学生の弟、直哉を思い起こさせる。似ているわけがないし似てもいないのだが、どことなく繋がってしまう。

「うん？　結城、何がおかしい。」

「あ、いえ。何も……。」

「そうか。笑ったみたいじゃったがな。で、標的が怖いってのは、どういうことだ。もう少し、きちんと説明できるか。」

「できません。」

「即答か。結城、もう少し言語力を磨け。自分の思うたこと、考えたことを言葉にして他人に伝える。いわゆるコミュニケーション能力は、これからますます必要になるんじゃぞ。」

「……はい。」

「端からできないなんて一言で片づけるなや。できる限り、言葉にしてみぃ。その努力はこれから先、必ずおまえのためになる。」

磯村監督は完全に教師の物言いになっていた。まるで口頭試問を受けているようだ。でも、わかる。

(3)監督は本気であたしの答えを聞きたがっている。

わかる。

沙耶もそっと下唇を舐めてみた。

「あの……練習のときは、ちゃんと撃つ、正しく撃つみたいなことをずっと考えてました。あたし、入部するまでライフルに触ったこともなかったので、余計にちゃんと正しく覚えなきゃって考えてました。周りより遅れている分、がんばらなくちゃって……。」

真面目だなと評されるかもと思ったが、磯村監督は何も言わなかった。促すような首肯を一度したきりだった。

ほっとする。

(4)真面目なんかじゃない。真剣に射撃と取り組む覚悟ができたわけでもない。まだまだ中途半端だと、自分自身が一番、わかっている。

あたしは中途半端だ。

でも逃げたくない。
今度逃げたら、心底から自分を許せなくなる。
ハードルに背を向けた沙耶を、花奈*は射撃という未知の世界に導いてくれた。足を踏み入れた世界をどう進むかは、沙耶しだいだ。
花奈に報いなくっちゃ。
そんな力みがあった。真面目ではなく力みだ。それが……。
「試合になったら、いつの間にか消えてたか。」
にやっ。磯村監督が笑う。
「はい、消えてました。」
誰かのため。自分のため。何かのため。そんな〝ため〟は知らぬ間に消えていた。
ただ、標的だけがある。
少し怖かった。
未知の世界が怖い。そして、昂ぶる。
知らない世界がここにある。
息を整え、標的に向かい合う。
重くて暑くて、身に着けたとたん自由が奪われるように感じたジャ*ケットが、かちりと身体を支えてくれる。手のひらに伝わるライフルの重量も安定のための重石になってくれるようだ。ただ、構えが乱れれば、支えは脆く崩れてしまう。
そんな諸々が理論ではなく実感として、沙耶に迫ってきた。
沙耶は受け止める。
試合時間、三十分。その間、この安定を維持する。乱れず、崩れず、標的に挑み続ける。
ものすごく久しぶりだな。
最初の一射の後、沙耶は小さく息を吐き出した。
この感覚、久しぶりだ。

試合前の緊張感と昂ぶり、集中と弛緩のバランス、そして、恐れと興奮。
本当に久しぶりだ。久しく忘れていた。
一瞬、ほんの刹那、ハードルの並んだトラックが見えた。風が舞って、光が差す。競技場の風景は瞬き一つの間に霧散していった。
息を整える。
ライフルを構える。
二射、三射……。標的を見据え、*トリガーを引く。
やはり消えていく。
緊張も昂ぶりも久々だと震える心も、撃つたびに、トリガーに指をかけるたびに薄れて、消えていく。
沙耶とライフルと標的だけが残った。
「……陸上と射撃って、まるで違うのにとてもよく似ている。そんな風に感じて……。でも、陸上ではできなかったんです。」
「できなかった？」
「はい。あたし……中学のときに陸上部でハードルやってました。走るのも跳ぶのも好きでした。でも、試合のとき、ハードルだけを見ることができたかって言われると、ちょっと、よくわかりません。記録を伸ばさなきゃとか考えてたり、他の選手の調子が気になったり……、でも、今日はそんな風じゃなかったんです。まだ、*ビームライフルの試合がよくわかってないってのもあるとは思うんですけど……、思うんですけど、でも、あの……できたんです。他のこと考えないで、撃つことだけ考えられた気がして……。」
磯村監督はほとんど言葉を挟まず、時折、軽く頷きながら聞いていた。いつの間にか、心にあったこと、漠然と感じたこと、沙耶なりに考えたことをあらかた、(5)ぽそぽそとしゃべっていた。
「結城。」

しゃべり終えて口中の唾を呑み込んだとき、磯村監督に改めて呼ばれた。

「はい。」

「おまえは伸びるぞ。」

「え？」

「これから、どんどん強うなれる。オリンピック出場も夢じゃない。」

「はぁ？」

(6) 我知らず顎を引いていた。

オリンピック？　どうして、そこまで話が飛んじゃうの？　冗談？

だとしたら、あまり上等じゃないと思う。もうちょっと現実味のあるジョークでないと笑えない。

（あさのあつこ「アスリーツ」による）

〔注〕ライフル――射撃競技用のライフル銃のこと。

花奈――沙耶の中学時代からの同級生。二人でこの高校の射撃部に入るために猛勉強して一緒に入学し、入部した。

ジャケット――射撃競技用のジャケットで、硬くて、装着すると姿勢が定まりやすくなる。

トリガー――銃の引き金。

ビームライフル――射撃競技用のライフル銃で、可視光線を発する光線銃。

〔問1〕(1) 唇を結び顎を引いた。(6) 我知らず顎を引いていた。とあるが、この沙耶のしぐさを通して、作者が表現しようとしたことの説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　予想もしていなかったような質問や言葉に対し、すぐに答えられずためらって、答える気力をなくしている様子。

イ　思いもよらなかった質問や言葉を自分だけに投げかけられ、緊張しながらも、何とか落ち着こうとしている様子。

ウ　どう捉えていいのか分からない質問や言葉、状況に直面し、戸惑いながらも自分なりに受け止めようとする様子。

エ　どう答えていいのか分からない質問や言葉を言われたとき、閉口して、言葉選びに慎重になり身構えている様子。

〔問2〕(2) それで……怖かったです。とあるが、そのように感じた沙耶の心情の説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　これまで経験したことのない世界に対する怖さを感じるとともに、久しぶりに試合前の感覚がよみがえったことで中学時代を思い出し、不安を感じている。

イ　これまで経験したことのない世界に対する怖さを感じながらも、あらゆる雑念がなくなって自分と標的だけしかないという、集中力の高まりを感じている。

ウ　これまで経験したことのない世界に対する怖さを感じるとともに、正しい姿勢を維持して結果を残さなければという雑念が払えず、焦燥感に駆られている。

エ　これまで経験したことのない世界に対する怖さを感じながらも、目の前の標的が大きく迫ってくるように見え、自分の力で立ち向かえるのだと感じている。

〔問3〕(3)わかる。とあるが、この時の沙耶の思いを表現したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　監督が言うように、考えたことを自分の言葉にしていけば最終的には自分にもわかるということ。

イ　監督は既に推測している沙耶の答えを、沙耶自身に確認(かくにん)したがっていることがわかるということ。

ウ　監督の物の言い方から、監督が沙耶自身に成長を気付かせようとしているのがわかるということ。

エ　監督の質問に対して自分の答えが説明不足であるということは、沙耶自身にもわかるということ。

〔問4〕(4)真面目なんかじゃない。とあるが、そのように考えるときの沙耶の思いとはどのようなものか、**七十字以内**で説明せよ。

〔問5〕(5)ぼそぼそとしゃべっていた。とあるが、この時の沙耶の心情を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　監督の質問を受けるうちに、自分の考えをしっかりと持っていたことに気付き、話したいという衝動に駆られて次々と本音が口から出てしまっていたという思い。

イ　自分の考えはまとまっていなかったはずなのに、監督の質問に答えていくうちに、自分の心の動きや今の思いをほとんどそのまま話してしまっていたという思い。

ウ　自分から話したいわけではなかったのに、監督の質問につられてしまって、語るつもりではなかった自分の中学時代のことまでも話してしまっていたという思い。

エ　監督にコミュニケーション能力の必要性を説かれ、自分の思っていたことや考えたことをまとめていくうちに、自然と話すことができてしまっていたという思い。

〔問6〕本文の表現や内容を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　言葉の数が少ない監督に対し、主人公には発話と心の内で語らせており、対照的に描くことにより二人の性格の違いを明確にしている。

イ　未知の世界である射撃の試合に立ち向かう主人公の姿を淡々と描くことで、試合中の緊迫した臨場感を読者に味わわせようとしている。

ウ　主人公の言葉に「……」が多いのは、主人公と監督の話がかみ合っていないからで、世代を越えて話をすることの難しさを伝えている。

エ　自身の心の中を整理させるかたちを通して、主人公にこれまでの思いや状況を語らせ、今の思いをより鮮明に読者に感じ取らせている。

4 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

私たちの祖先は海にすんでいた。何億年も前の私たちの祖先は、魚だったのだ。その魚の一部が陸上に進出して、私たちに進化した。もちろん陸上に進出するためには、体のいろいろな部分を変化させなくてはならなかった。

【図】の系統樹Aは、脊椎動物から六種（魚類のコイ、両生類のカエル、爬虫類のトカゲ、鳥類のニワトリ、哺乳類のイヌとヒト）を選んで、それらの進化の道すじを示した系統樹である。陸上生活に適応する進化的変化はたくさん起きたが、その中の三つを黒い四角で示してある。

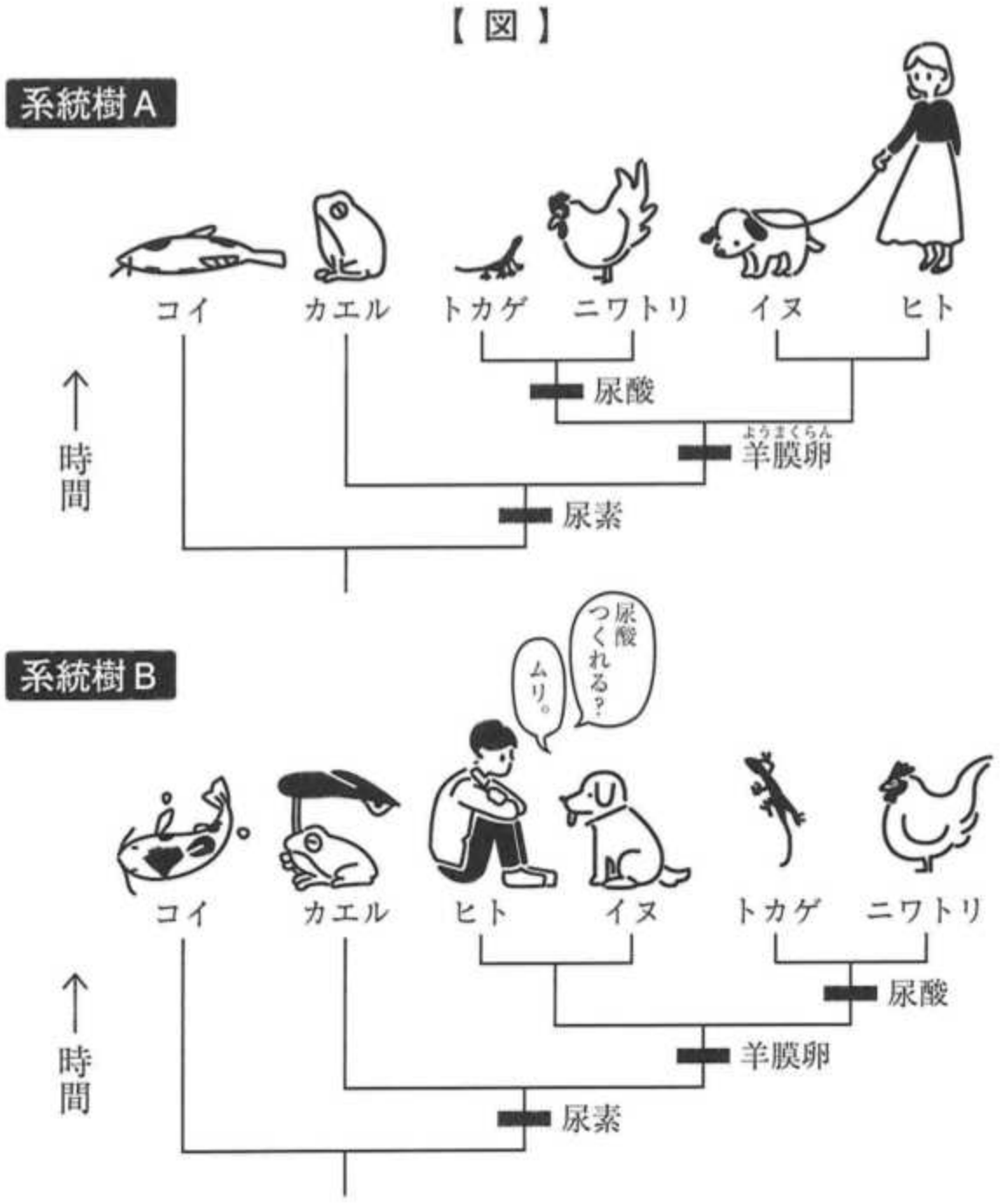
脊椎動物の体はたくさんのタンパク質でできている。そして古くなったタンパク質は分解されて体の外に捨てられる。タンパク質が分解されると、どうしてもできてしまうのがアンモニアである。

アンモニアは有害な物質なので、体の外に捨てなければならない。でも、昔はとくに困らなかった。私たちの祖先は魚類であり、海や川にすんでいたからだ。体の周りに大量の水があるので、アンモニアを捨てるために水がいくらでも使えたからである。

しかし、陸に上がった両生類には、そういうことができない。陸上には水が少ないので、なかなかアンモニアを捨てられない。でも、アンモニアは有毒なので、あまり体の中に溜めておけない。そこで、とりあえずアンモニアを尿素に作り変えるように進化した。これが系統樹の中の一番下の黒い四角である。尿素も無毒ではないが、アンモニアよりは毒性が低いので、ある程度なら体の中に溜めておくことができるのだ。

それでも両生類は、水辺からあまり離れて生活することができない。その理由の一つは、卵が柔らかくて、すぐに乾燥してしまうからだ。だから、ほとんどのカエルは卵を水中に産む。水辺を離れて生活するためには、つまり、さらに陸上生活に適応するためには、卵が乾燥しない工夫をしなければならない。

【図】



その工夫を進化させた卵が羊膜卵である（真ん中の黒い四角）。羊膜卵とは、簡単にいうと、羊膜で作った袋の中に水を入れ、その中に胚（発生初期の子ども）を入れた卵である。袋の中の水に、子どもをポチャンと入れておけば、乾燥しないからだ。さらに卵の外側に殻を作って、乾燥しにくくしている。この羊膜卵を進化させた動物は羊膜類と呼ばれ、水辺から離れて生活することができるようになった。この初期の羊膜類から、爬虫類や哺乳類が進化した（間違えやすいが、爬虫類から哺乳類が進化したわけではない）。そしてさらに、爬虫類の一部から鳥類が進化したのである。

爬虫類や鳥類にいたる系統では、さらに陸上生活に適した特徴が進化した。尿素を、尿酸に作り変えるような進化が起きたのである（一番上の黒い四角）。

尿酸も尿素のように毒性が低い。でも尿酸には、その他にもいいことがある。尿酸は水に溶けにくいので、捨てるときにほとんど水を使わなくていいのだ。

陸上にすんでいる動物にとって、水を手に入れるのは大変なことである。だから、水はなるべく捨てたくない。それなのに、私たちは結構たくさんの尿を出して、水をたくさん捨てている。もったいない話である。一方、ニワトリやトカゲは、尿をあまり出さない。ニワトリやトカゲが、イヌみたいに大量の尿を出している姿を見た人はいないはずだ。それは、尿素を尿酸に変える能力を進化させたからである。

つまり、哺乳類は両生類より陸上生活に適応しているが、爬虫類と鳥類は哺乳類よりもさらに陸上生活に適応しているのである。

ところで(1)【図】の系統樹Aと系統樹Bは、同じ系統関係を表している。しかし、見た目の印象はだいぶ違う。よく目にするのはAのような系統樹だ。これだと、ヒトは進化の最後に現れた種で、一番優れた生物であるかのような印象を受ける。

しかし陸上生活への適応という意味では、Bのような系統樹の方がわかりやすい。トカゲやニワトリの方がヒトより陸上生活に適応しているからだ。系統樹Bを見ると、ニワトリが進化の最後に現れた種で、一番優れた生物であるかのような印象を受ける。

もちろん、進化の最後に現れた種は、ヒトでもニワトリでもない。というか、コイもカエルもヒトもイヌもトカゲもニワトリも、すべて今生きている種だ。だから、みんな進化の最後に現れた種ともいえる。コイもカエルもヒトもイヌもトカゲもニワトリも、生命が誕生してからおよそ四十億年という同じ長さの時間を進化してきた生物なのだ。そして、陸上生活という点から見れば、この系統樹の中で一番優れた種はトカゲとニワトリなのである。

もしも「走るのが速い」ことを「優れた」というのなら、一番優れた生物はイヌだろう。「泳ぐのが速い」のはコイだろうし、「計算が速い」のはヒトだろう。何を「優れた」と考えるかによって、つまり何を「進歩」と考えるかによって、生物の順番は入れ替わるのだ。

さっきは「陸上生活に適した」ことを「優れた」と考えたが、「水中生活に適した」ことを「優れた」と考えれば、話は逆になる。トカゲは、陸上生活に適した特徴が発達したが、それは水中生活に適した特徴が退化したことを意味する（ちなみに「退化」の反対は、「進化」ではなく「発達」である。生物の持つ構造が小さくなったり単純になったりするのが退化で、大きくなったり複雑になったりするのが発達だ。「退化」も「発達」も進化の一種である）。「水中生活に適した」ことを「優れた」と考えれば、もちろん一番優れた生物はコイになる。

いろいろと考えてみると、客観的に優れた生物というものは、いないことがわかる。陸上生活に優れた生物は、水中生活に劣った生物だ。走るのに優れた生物は、力に劣った生物だ。チーターのように速く走るためには、ライオンのような力強さは諦めなくてはならないのだ。

そして、(2)計算が得意な生物は、空腹に弱い生物だ。脳は大量のエネルギーを使う器官である。私たちヒトの脳は体重の二パーセントしかないにもかかわらず、体全体で消費するエネルギーの二〇～二五パーセントも使ってしまう。大きな脳は、どんどんエネルギーを使うので、その分たくさん食べなくてはいけない。もしも飢饉が起きて農作物が取れなくなり、食べ物がなくなれば、脳が大きい人から死んでいくだろう。だから食糧事情が悪い場合は、脳が小さい方が「優れた」状態なのだ。

実際、人類の進化を見ると、脳は一直線に大きくなってきたわけではない。ネアンデルタール人は私たちヒトより脳が大きかったけれど、ネアンデルタール人は絶滅し、私たちヒトは生き残った。その私たちヒトも、最近一万年ぐらいは脳が小さくなるように進化している。これらの事実が意味することは、脳は大きければ良いわけではないということだ。

「ある条件で優れている」ということは「別の条件では劣っている」ということだ。したがって、あらゆる条件で優れた生物というものは、理論的にありえない。そして、あらゆる条件で優れた生物がいない以上、進化は進歩とはいえない。生物は、そのときどきの環境に適応するように進化するだけなのだ。

生物が進化すると考えた人は*ダーウィン以前にもたくさんいた。でも、*チェンバースも*スペンサーも、みんな進化は進歩だと思っていた。進化が進歩ではないことを、きちんと示したのは、ダーウィンが初めてなのだ。それではダーウィンは、なぜ進化は進歩でないと気づいたのだろう。

(3)進化が進歩ではないとダーウィンが気づいた理由は、生物が自然選択によって進化することを発見したからだ。ここで間違えやすいことは、自然選択を発見したのはダーウィンではないということだ。ダーウィンが発見したのは「自然選択」ではなくて「自然選択によって生物が進化すること」だ。

*『種の起源』が出版される前から、生物に自然選択が働いていることは常識だった。当時、進化に興味がある人なら、誰だって知っていた。それなのに、どうしてダーウィンが自然選択を発見したように誤解されているのだろうか。

実は、自然選択はおもに二種類に分けられる。安定化選択と方向性選択だ。

安定化選択とは、平均的な変異を持つ個体が、子どもを一番多く残す場合だ。たとえば、背が高過ぎたり、反対に背が低過ぎたりすると、病気になりやすく子どもを多く残せない場合などだ。この場合は、中ぐらいの背の個体が、子どもを一番多く残すことになる。つまり安定化選択は、生物を変化させないように働くのである。

一方、方向性選択は、極端な変異を持つ個体が、子どもを多く残す場合だ。たとえば、背が高い個体は、ライオンを早く見つけられるので逃げのびる確率が高く、子どもを多く残せる場合などだ。この場合は、背の高い個体が増えていくことになる。このように方向性選択は、生物を変化させるように働くのである。

ダーウィンが『種の起源』を出版する前から、安定化選択が存在することは広く知られていた。つまり当時は、自然選択は生物を進化させない力だと考えられていたのである。ところが、ダーウィンはそれに加えて、自然選択には生物を進化させる力もあると考えた。ダーウィンは、方向性選択を発見したのである。

方向性選択が働けば、生物は自動的に、ただ環境に適応するように進化する。たとえば気候が暑くなったり寒くなったりを繰り返すとしよう。その場合、生物は、暑さへの適応と寒さへの適応を、何度でも繰り返すことだろう。生物の進化に目的地はない。目の前の環境に、自動的に適応するだけなのだ。こういう進化なら明らかに進歩とは無関係なの

で、進化は進歩でないとダーウィンは気づいたのだろう。

地球には素晴らしい生物があふれている。小さな細菌から高さ一〇〇メートルを超す巨木、豊かな生態系をはぐくむ土壌を作る微生物、大海原を泳ぐクジラ、空を飛ぶ鳥、そして素晴らしい知能を持つ私たち。こんな多様な生物を方向性選択は作り上げることができるのだ。もしも進化が進歩だったり、世界が*「存在の偉大な連鎖」だったりしたら、つまり一直線の流れしかなかったら、これほどみごとな生物多様性は実現していなかっただろう。私たちが目にしている(4)地球上の生物多様性は、「存在の偉大な連鎖」を超えたものなのだ。

（更科功「若い読者に贈る美しい生物学講義」による）

〔注〕ダーウィン――十九世紀の自然科学者。
チェンバース――十九世紀の進化論の考察者。
スペンサー――十九世紀のジャーナリスト。
『種の起源』――ダーウィンによる進化論についての著作。
「存在の偉大な連鎖」――中世から近代初期にかけてキリスト教を基礎にしたスコラ哲学の学者が、石ころから神まで、世界に存在するすべてのものを階級制度に組み込んだ考え方で、人間が生物のなかでは最上位にいる。

〔問1〕(1)【図】の系統樹Aと系統樹Bは、同じ系統関係を表している。とあるが、二つの系統樹の違いは何か。これを説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア　系統樹Aは、陸上生活にどの程度熟達しているかを基準にして作られたものであり、系統樹Bは、水中生活から段階を追って進化してきた流れが分かりやすいようアレンジして図式化したものである。

イ　系統樹Aは、脳の進化を中心にしてそれと関係する要素を示して作られたものであり、系統樹Bは、「どこが分岐点か」という観点から進化の過程を時系列で理解できるように図式化したものである。

ウ　系統樹Aは、ダーウィン以前の進化論に基づいた自然選択の考え方で作られたものであり、系統樹Bは、ダーウィン以降の方向性選択の考え方を踏まえて捉え直された進化論を図式化したものである。

エ　系統樹Aは、人間が最も進化した生物であるというイメージを前提にして進化の流れを示したものであり、系統樹Bは、「陸上生活に適する」形での進化の流れが見えるように図式化したものである。

〔問2〕(2)計算が得意な生物は、空腹に弱い生物だ。とあるが、この例は、どのようなことを伝えようとして持ち出された具体例か。これを説明したものとして**適切でないもの**は、次のうちではどれか。

ア　知性的な要素で優れる者は、本能的な要素では劣っていることが一般的であるということ。

イ　脳の発達がそのまま進化ではない、つまり人間が最も進化しているのではないということ。

ウ　進化は様々な要素で見られ、その要素ごとに適応した種は異なっているものだということ。

エ　人間が種として優れているというのは、一部の機能を基準にしただけのものだということ。

〔問3〕(3)進化が進歩ではない とあるが、どのように違うというのか、**五十字以内**で説明せよ。

〔問4〕(4)地球上の生物多様性は、「存在の偉大な連鎖」を超えたものなのだ。とあるが、どういうことか。これを説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア　「存在の偉大な連鎖」を裏付けているのは近代の西洋的世界観だから、様々な思想の入り乱れている現代の社会を論ずるには不十分なものになっているということ。

イ　「存在の偉大な連鎖」は、中世までの様々な事物を説明することは可能でも、多様に進化した現在の地球上の生物のありようを捉えているものではないということ。

ウ　現在の安定した生態系を保っている生物の多様性は、進化を一直線の上にあると考える「存在の偉大な連鎖」の発想からは、決して説明し得ないものだということ。

エ　現在の地球上の生態系は様々な分野で起きた「存在の偉大な連鎖」の結果の集合体であるので、単一の進化論で説明できるものではなくなってきているということ。

〔問5〕本文では生物の多様性を評価しているが、生物に限らず、自分の身の回りで「多様性」が必要であると感じることがあるか。本文の全体の内容とあなた自身が経験したことなどを踏まえて、このことについてのあなたの考えを**二百五十字以内**で書け。なお、、や。や「などのほか、書き出しや改行の際の空欄(くうらん)もそれぞれ字数に数えること。

5 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお本文末の［　　］で囲った文章は一首目の和歌の現代語訳である。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

(1)和歌は世界を見ない。「見る」のではなく、聞く、触れる、嗅ぐ。視覚ではなく聴覚、触覚、嗅覚また味覚で世界を受けとめる。感受する人と感受されるモノが、主体と客体としてあるのではなく、感受するモノのなかに人がいる。人のなかにそれが入り込んでいる。

和歌は多く夕暮れや夜を詠い、薄明、薄暮を好む。見えないものを身体で受けとめ、共振する。そのなかに住まい、包まれ抱かれる。絵の浮かぶ歌は多いが、それらもまた、こちらからあちらを見るという客観的な世界ではなく、そのなかに歌人が、人が、「私」がいる、と感じられる。人間が景色を見るのではなく、景色のなかに人間がいる。匂い、風、音などを感じるとき、身と世界が距離をとって立つのではなく、一体としてある。

きみが行くこしのしら山しらねども雪のまにまに跡はたづねむ
（古今集＊　藤原兼輔）

たとえばこの歌を読むと、わたしには目の前に真っ白な世界が広がる。何にもない。あなたの行く先、行く道は、自分には分からない、知らない。あなたの姿がしだいに点景となって雪のなかに埋もれ、見えなくなる。それでもあなたの行く方向を、じっと目を凝らして見続けている。そんな光景が浮かぶ。

そうして、かけがえのない人を見送る淋しさとともに(2)穏やかな温かさを感じる。「きみ」の姿は景のなかに見出すことはできないが、「きみ」を懸命に見続ける人が雪景色のなかに立ち、白一面のなかに去り行く「きみ」を感じている。送る人と「きみ」とが、何にもない銀白色に包みこまれている。すべてが雪に覆われて何もない。あるのは、二人の魂のまじわりだけである。「雪のまにまに」、あなたの行くがままに、雪にまかせて見送る。あるがままに起こるがままに出来事を、人を、受けとめる。歌から浮かぶ景は、何もないただ真っ白な無。それでいて、その白一面の世界のなかに魂が交流する。あるがままにあるとするその受動性が、わたしを穏やかな気持ちにする。

景と心は一つである。それが表れているのは、代表的には掛詞＊である。「雪（ゆき）」は雪と行き、自然の相と人間の行動が表裏一体として(3)修辞は単なる仕掛け、飾りではなく、ものの捉え方、(4)認識のありようそのものである。自然と人間が一体なのである。言葉がそうだから認識がそうなったのか、認識がそうだから言葉がそうなのか。日本語の同音異義語の多さは、景と心、自然と人間が一体としてあるという認識のありようにおいて生まれ、あるいは言葉がそれを育て、そのようにして世界はたち現れる。

この歌の場合、第二句「こしのしら山」は自然の景だが、同音反復で「しらねども」と、あっという間に「知らない」という人間の行為を引き出す。＊枕詞、＊序詞のような役割を果たしている。「きみ」が雪のなかを行ったかどうか、ではない。「きみ」は＊越に赴任する、越ならば＊白山である。そこで「しら山」を中心にして「しら」「雪」「跡」という縁のある語が引き出される。＊縁語によってまた、自然と人間行為は重層的になる。

君が行く道の長手を繰り畳ね焼き滅ぼさむ天の火もがも
（万葉集　＊狭野弟上娘子）

初句「きみが行く」の言葉から、わたしは即座にこの歌を連想する。

あなたが行く道の、その長い道のりをたぐり寄せて畳んで、焼き滅ぼしてしまう天の火が欲しい！　というものだ。恋人の中臣宅守が流罪になって越前に行くとき、「行かないで！」「私は、行かせない！」と叫ぶ激しい愛の絶唱である。

舞台は同じく越の国だが、炎熱の夏を思わせる。草木生い茂る道がそれゆえに一層真っ赤に燃え上がり、炎がゆらめき立ちのぼる。男女の間の引き裂かれる別れ、生死の際にあるぎりぎりの別れが、真っ赤な炎を背景に激しく詠われる。

兼輔の歌は真冬である。男同士の仕事上の派遣での抑制のきいたはなむけ、(5)「行ってらっしゃい、お慕いしています」である。万葉・狭野弟上娘子の方は、別れの悲しみが真夏の炎熱の赤のなかに動的にゆらめき、*東尋坊のようなそそり立つ絶壁に悲しみの波はたたきつけられまた砕ける。激しい情感である。

兼輔の方は、赤に対して白、動に対して静、夏に対して冬、海に対して山と、はなむけのなかに淋しさをにじませ、いつまでも思いを寄せるという静かな情愛である。兼輔の歌を読むとき、他方で狭野弟上娘子の歌をわたしは思い浮かべ、別れのさまざまな相、人を送り出し見送るさまざまな局面の、さまざまな思いを感じ取る。兼輔の歌が狭野弟上娘子の歌を本*歌として取っているとは定義上言えないが、それでも、言葉と*措辞と主題を引き継ぎ、引き延ばし、加えている、と思える。一つの歌には、その歌が出現するまでの、歌の歴史と情感の歴史、言葉と感受の蓄積があり、その歴史・伝統がわたしたちの感受性を育てている。

雪景色を見ると、わたしは兼輔の歌を思い、そうして飼っていた老犬がわたしの留守のうちにさまよい出て、何日も帰らなかったときのことを思い出す。捜しあぐねて数日後の朝、外は一面真っ白な雪景色に一変していた。朝日に照らし出された銀世界を眺め渡し、このどこかにわたしの愛犬がいるにちがいない、と目を凝らした。切ない思いで見渡しながらも、わが老犬はこの雪のなかに抱かれているのだと思ったとき、ともに過ごした者を見失った哀切の念や悲しみが、いつのまにか静かな思いになっていくのを感じた。「雪のまにまに」、去り行くままに、雪にまかせて、わたしも老犬もともにこの同じ自然のなかにいる、と思った。見失ったこと、見失った老犬、そのすべてを受けとめ、朝日に輝く雪一面の世界にわたしは立ちつくしていた。

和歌は、自然のうつろいとそこに織りなされる人々の有情の機微と結びついている。わたしの住む地にも雪が降り積もり白一面の世界を見渡すとき、この歌を思い、失ったいくつもの「跡」を追う。炎暑の夏にはまた、*劫火に託するまでの激しい思いをよみがえらせるのである。

（篠田治美「和歌と日本語」による）

あなたが行く越の国の、雪深い白山を、私は知らないけれども、あなたの足どりのとおりに、その雪のなか、跡をたずねて参りましょう。

（「新潮日本古典集成　古今和歌集」による）

〔注〕
藤原兼輔――平安時代の歌人。
掛詞――和歌の修辞法の一つ。同音異義を利用して、一語に複数の意味を持たせる技法。
枕詞――和歌の修辞法の一つ。特定の言葉を導く前置きの表現。
序詞――和歌の修辞法の一つ。ある言葉を導き出す前置きの表現。
越――北陸地方の古称。越前も同じ。
白山――石川県と岐阜県にまたがる山。かつては「越白嶺」と書いて「こしのしらね」と呼ばれ、のち「しらやま」と変わり、現在に至る。

縁語――和歌の修辞法の一つ。関連の深い語を合わせ、用いることで、内容に深みを持たせる技法。
狭野弟上娘子――奈良時代の女流歌人。
東尋坊――福井県にある崖の名勝。
本歌――古歌を元に和歌を作った場合のそのもとの歌。
措辞――詩歌・文章における言葉の言い回しや配置。
劫火――全世界を焼き尽くすという猛火。もとは仏教用語。

〔問1〕(1) 和歌は世界を見ない。とあるが、どういうことか。これを説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア　和歌は、視覚的に捉えた景色を読み手と共有しようとするのではなく、その景色の中で感じた感覚と個人的な思いを歌の中に具象化して表現しようとしたものだということ。

イ　和歌は、視覚的に捉えた対象を客体として描写しようとするのではなく、目を閉じた時に五感や身体全体で感知される抽象的感覚を形象化しようとしているのだということ。

ウ　和歌は、視覚的に捉えた対象を客体として詠みあらわそうとするのではなく、捉えた対象への思いとともにそこにある自分も含めた世界を詠もうとしているのだということ。

エ　和歌は、視覚的に捉えた現実の景色を描写して詠まれるのではなく、対象と一体化することで感じる微妙な感覚を具体的な事象に仮託して表現しようとしたものだということ。

〔問2〕(2) 穏やかな温かさを感じる。とあるが、筆者がこのようにいう理由を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア　別れに際して、自己の感情を表に出さずに出発を見送り続けることで、去って行く「きみ」の未来の幸せを静かに心から願っている姿に、送る人の心の豊かさがあると感じさせてくれるから。

イ　別れに際して、去り行く「きみ」を待ち構える旅の厳しさに思いをはせて、降りしきる雪の中で門出をいつまでも見守ろうとする光景に、送る人の優しさがあるのだと感じさせてくれるから。

ウ　別れに際して、両者が一切の事実を引き受け、白一面の無の世界に立ち向かうことができるのは、確かにそこにお互いを信じ合う気持ちが存在しているからなのだと感じさせてくれるから。

エ　別れに際して、「きみ」は去り行くしかないのだという運命を受け入れて、降りしきる雪の中で静かに見送り続けられるのは、確かにそこに魂の交流があるからだと感じさせてくれるから。

〔問3〕(3)修辞・(4)認識とあるが、その関係を説明した筆者の考え方として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア　自然と人間の行動が一体であるという認識が、その認識から生まれた言葉を駆使した修辞を使うことで、さらに深められている。

イ　自然と人間行為の双方に通じる言葉を修辞に用いながら詠むことで、作者の内面を自然の情景として暗示的に認識させている。

ウ　自然と人間の認識を一体にする言葉を修辞として用いることで、伝統的な和歌の世界に描かれた認識へとそれとなく導いている。

エ　自然と人間が一体であるという伝統的な見方に基づいた修辞を用いることで、重層性を持った、情趣豊かな認識へと導いている。

〔問4〕本文中の二首の和歌の内容を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア　藤原兼輔の和歌は、狭野弟上娘子の和歌と同じ初句で読み出し、同じ別れの思いを詠みながらも、印象や趣向を対比的にして様々な別れの形や心情があることを示している。

イ　藤原兼輔の和歌は、狭野弟上娘子の和歌の情感や情景や表現の趣向を引き継いで別れの思いを詠んでいるが、そこに詠まれた激情を奥に隠して、静かに詠み上げられている。

ウ　狭野弟上娘子の和歌は、非現実的な比喩を使用して、別れの激情を詠んでいるが、それは現実の風景に情感を寄せるという反転した形で藤原兼輔の和歌に引き継がれている。

エ　狭野弟上娘子の和歌は、別れという伝統的な主題を、率直な激情とともに詠んでいるが、藤原兼輔の和歌では洗練された表現によって複雑な心情の吐露として歌われている。

〔問5〕(5)「行ってらっしゃい、お慕いしています」とあるが、この思いを筆者が読み取ったと思われる部分を、本文中の和歌から**十字以内**で抜き出して書け。